

テレビ番組視聴による 統合失調症を 持つ人に対する 偏見低減の効果

○小平朋江（聖隷クリストファー大学）

tomoe-k@seirei.ac.jp

伊藤武彦（和光大学）

take@wako.ac.jp

日本教育心理学会第51回総会

静岡大学 大学会館3Fホール

2009年9月20日～22日

PF076

在籍責任時間：9月22日10:30-11:30

問題

- 本研究では、日常生活でも人々が接触する機会の多いテレビ番組を用い、大学生を対象に実験により、質問紙で統合失調症を持つ人に対する大学生の態度の変化を測定し、TV番組のビデオ視聴による統合失調症を持つ人への偏見低減のための教育の効果を検討することである。
- 今回は、二人で統合失調症を抱えながら地域の商店街で宅配サービスの仕事をしている夫婦が出演する番組に注目した。二人は番組の中で、幻聴などの症状に支配されていたり、精神科の入退院を繰り返していたことなど病いの体験を語ったり、現在元気に支えあいながら仕事している様子が映像で紹介される。

目的

- 本研究での番組による偏見低減の効果を(1) 事前事後テストの得点差の有意性と、(2) 得点差から見た効果量と(3) ポジティブな変化があった人数の割合から見た効果の一般性の3点(南風原)から明らかにする。
- 感想文の分析により変化の要因を探索する。

方法

- 研究協力者：文系大学生148人（有効142人）看護大学生139人（有効136人）。
- 実験刺激：NHK教育テレビで2008年1月5日放送の番組「きらっといきる」（タイトル：ふたりで届けたい～統合失調症・狭間英行さん美加子さん～）約30分を録画したVHSビデオ。
- 質問紙：下位尺度として社会的距離尺度10項目とイメージ尺度10項目からなる「精神障害に対する態度測定尺度」（AMD尺度：北岡，2001）
- 手続き：テレビ番組視聴前に全員の被験者に1回目の質問紙を実施した。テレビ番組を視聴させた後、2回目の質問紙を実施した。

番組紹介

- 青森市内の商店街で宅配サービスを行う狭間英行さん・美加子さん夫妻。統合失調症の二人が街の人々とふれあいながら、地域の中で生き生きと暮らす様子を紹介する。
青森市の商店街で宅配サービスを行う狭間英行さん・美加子さん夫妻。買い物に出られない人や重い荷物を運ぶことができない買い物客に代わって、自宅まで商品を運ぶ。2人には統合失調症という精神の障害がある。人と接することが苦手だった2人は、街の人たちとのふれあいのなかで少しずつ自信を取り戻してきた。番組では狭間さん夫妻をスタジオに招き、精神障害者が地域の中で自立して生きることの難しさやすばらしさを描く。
- <http://archives.nhk.or.jp/chronicle/B10002200090801060030059/>

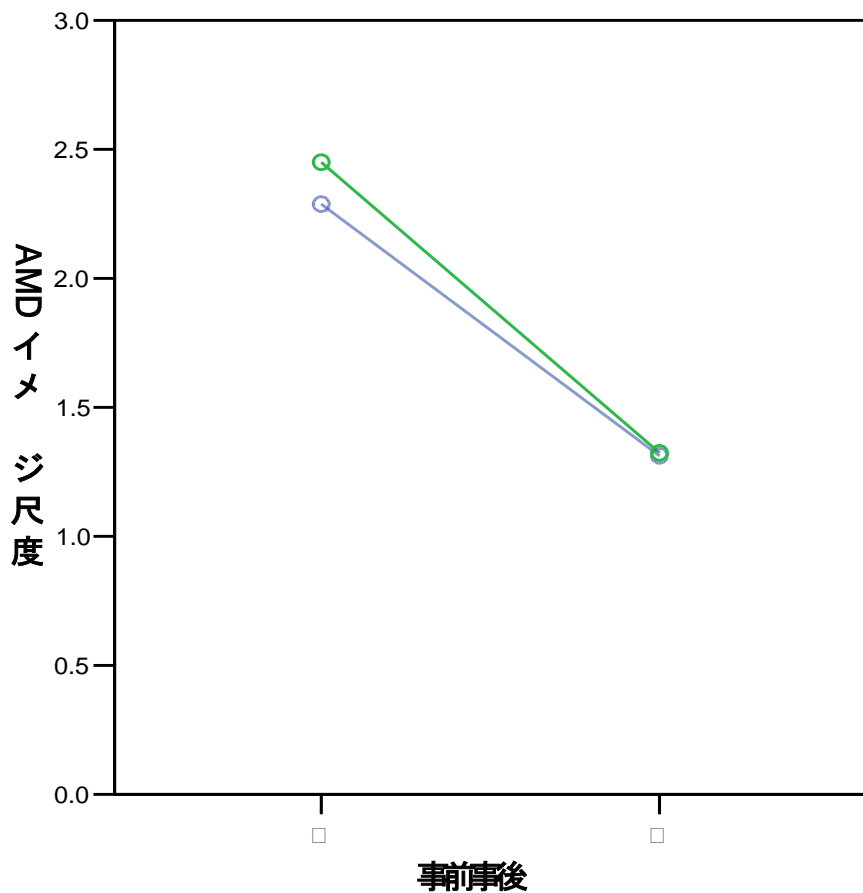
結果1 看護大学と文系大学との比較

- AMD尺度を2大学で比較すると、
- 社会的距離尺度では、事前テストでは看護大学($M = 1.62 \pm .55$)と文系大学($M = 1.68 \pm .61$)との間に有意差がなかった。しかし事後テストでは看護大学($M = 1.32 \pm .32$)は文系大学($M = 1.23 \pm .27$)大学よりも有意に偏見得点が大きかった($t(276) = 2.472, p = .014$)。
- イメージ尺度では、事前テストでは看護大学($M = 2.45 \pm .45$)は文系大学($M = 2.29 \pm .50$)より有意に偏見得点が大きかった($t(276) = 2.821, p = .005$)。しかし、事後テストでは看護大学($M = 1.62 \pm .55$)は文系大学($M = 1.68 \pm .61$)より得点がやや少なかったものの両者の間に有意差はなかった。

結果2 事前事後テストの 変化の大きさの比較

- 事前事後の比較では、
- 社会的距離尺度では、事前事後の変化の主効果が有意であり($F(1, 276)=97.014, p<.001$)かつ事前事後と2大学との交互作用も有意であった($F(1, 276)=4.107, p = .044$)ので、看護大学の得点の減少($M = -.30$)よりも文系大学の減少($M = -.45$)のほうが減少の度合いが有意に大きかった。
- イメージ尺度では、事前事後の変化の主効果が有意であり($F(1, 276)=820.164, p<.001$)かつ事前事後と2大学との交互作用も有意であった($F(1, 276)=4.231, p=.041$)ので、看護大学の得点の減少($M = -.83$)の度合いは文系大学の減少($M = -.61$)よりも大きかった。

統合失調症の悪いイメージの減少



統合失調症の社会的距離の減少

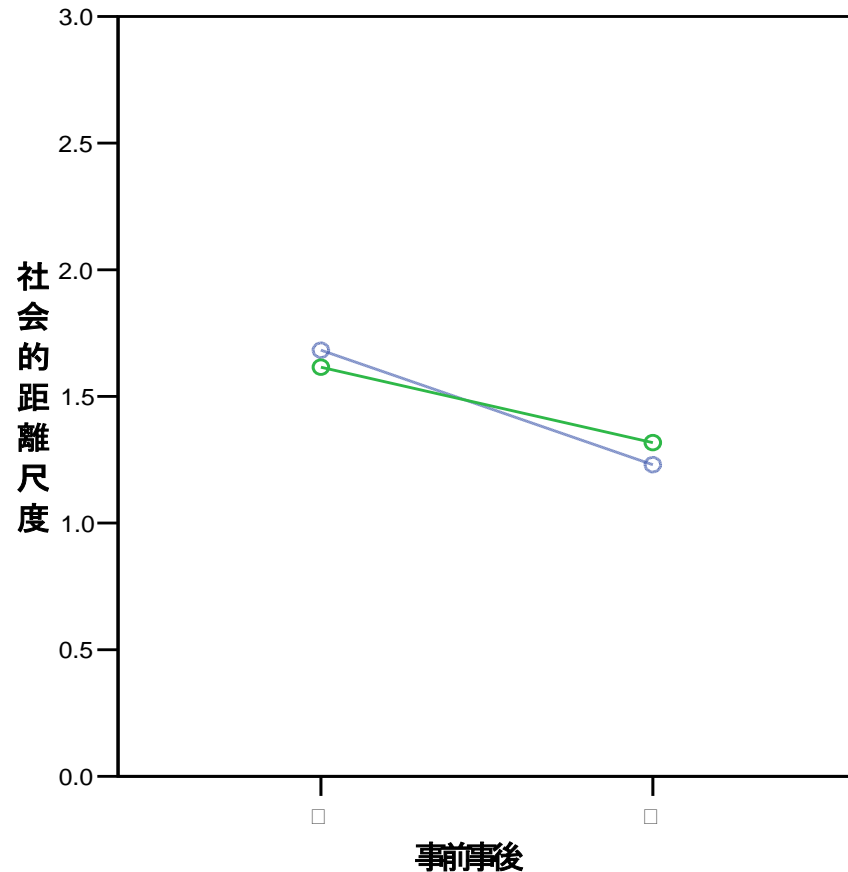


図1 文系大学生と看護大学生との比較
(青が文系大学生、緑が看護大学生)

結果3 効果量と効果の一般性

- 効果量を事前事後で比較すると
- 社会的距離尺度では看護大学の場合 $ES = .55$ であるのに対し、文系大学では $ES = .74$ であった。
- イメージ尺度では、看護大学の場合 $ES = 1.84$ であり、文系大学の場合の $ES = 1.22$ よりも大きかった。したがって2大学ともイメージ尺度得点の減少の方が、社会的距離尺度得点の減少よりも遙かに大きかったと言える。
- また効果の認められた人数の割合を比較すると、
- 社会的距離尺度では看護大学でも文系大学でも69%で差が無く、約7割の研究協力者の偏見が低減した。
- イメージ尺度では、ポジティブな変化があったのは、看護大学では98%であり文系大学では96%と、ほとんどの研究協力者に偏見低減の効果があった。

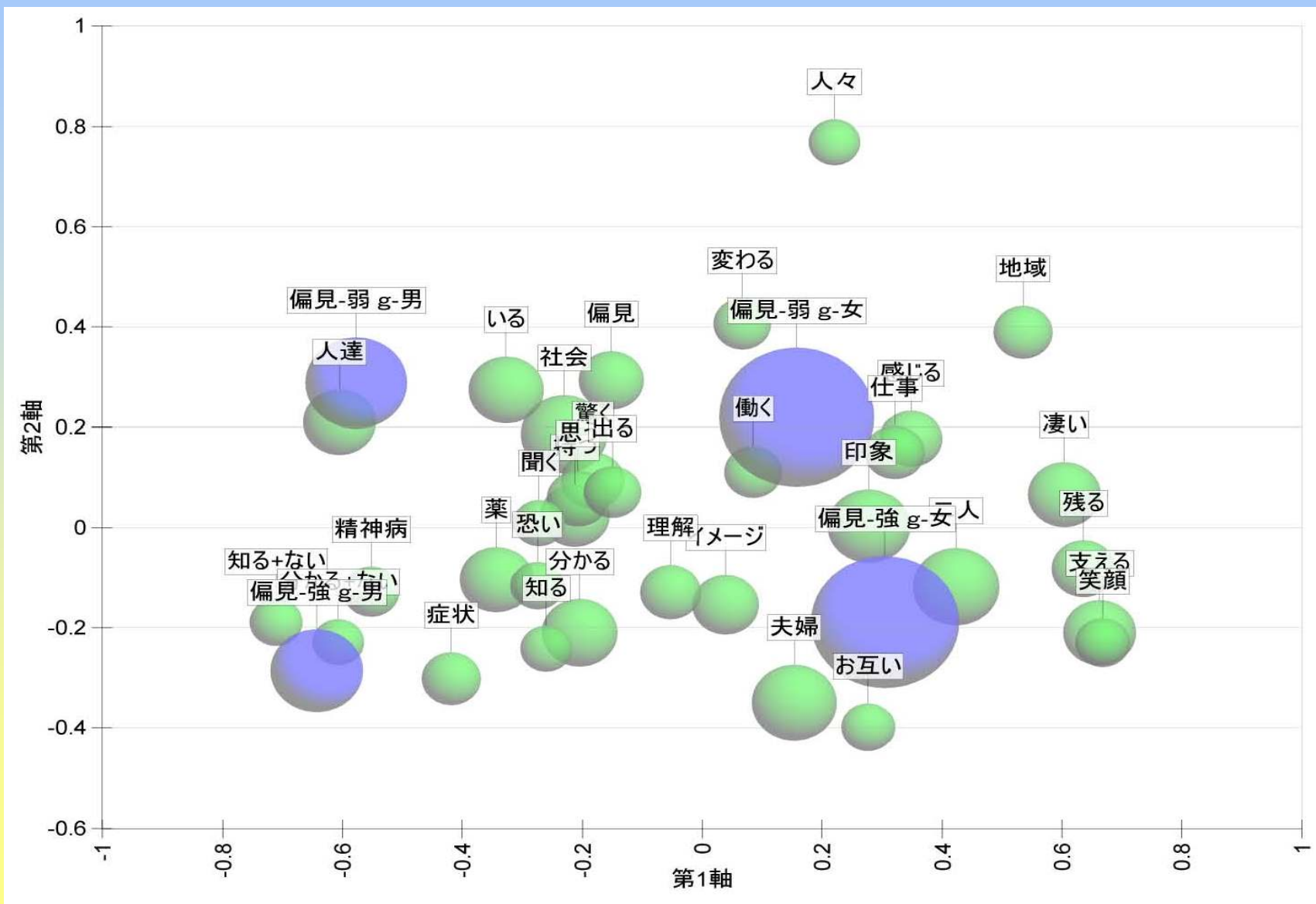
表1 男子の特徴語(左)と 女子の特徴語(右)

単語	品詞	男子頻度	全体頻度	指標値	単語	品詞	女子頻度	全体頻度	指標値
病気	名詞	37	80	25.74	二人	名詞	40	45	22.72
見る	動詞	33	69	24.54	凄い	形容詞	30	32	19.41
統合失調症	名詞	53	135	23.08	地域	名詞	22	22	16.23
ビデオ	名詞	30	72	16.05	残る	動詞	24	26	14.99
人達	名詞	17	33	14.36	支える	動詞	27	31	14.49
人	名詞	54	154	12.41	印象	名詞	31	38	13.37
生活	名詞	23	56	11.76	笑顔	名詞	18	19	11.92
知る+ない	動詞	11	19	10.88	印象的	名詞	16	16	11.80
自分	名詞	20	48	10.70	感じる	動詞	21	24	11.42
精神病	名詞	11	21	9.53	幸せそう	名詞	13	13	9.59
最初	名詞	8	12	9.14	場面	名詞	11	11	8.11
病気+?	名詞	8	13	8.47	仕事	名詞	18	22	7.85
分かる+ない	動詞	9	17	7.92	大切	名詞	14	16	7.61
委しい	形容詞	6	8	7.53	姿	名詞	12	13	7.49
名前	名詞	6	8	7.53	夫婦	名詞	29	40	6.47
いる	動詞	14	35	6.54	みる	動詞	11	13	5.40
わかる	動詞	6	10	6.18	幸せ	名詞	11	13	5.40
思う+ない	動詞	6	11	5.51	一緒	名詞	9	10	5.28
治る	動詞	5	8	5.38	楽しい	形容詞	9	10	5.28
犯す	動詞	4	5	5.25	イメージ	名詞	20	27	5.26
面	名詞	4	5	5.25					

結果4 テキストマイニングによる 感想文の分析

- 感想文の分析はまだ途中であるが、テキストマイニングによる表1や図2により、男女差が明確になった。
- 表1により、男子学生は「精神病」「病気」「統合失調症」などの病気そのものについての言及が多いのに対して、女子学生は「二人」「すごい」「支える」「笑顔」「幸せそう」などの対人関係性や情緒に関する単語を多用した結果が判明した。
- 男性が病気そのものについて語り、女性が感情や人間関係を多く語るという傾向は、ガン患者の語りの性差を比較したSeale, Charteris-Black, & Ziebland (2006) の研究結果と一致している。

図2 性と偏見強弱による対応分析



考察

- 日常生活で接触する機会の多いテレビ番組を用い、大学生を対象に実験により質問紙で統合失調症の人に対する大学生の態度の変化を測定し、ビデオ視聴による統合失調症の人への偏見低減のための教育の効果を検討した。
- 今回のTV番組のビデオはこれまでの教材(小平他, 2007ab;2008)よりも効果量が大きかった。
- 教材の「おもしろさ」「有意義さ」「役立つかどうか」「感動」などを評定させて調べることによりどのような要素が偏見低減に関連するかを診ることが今後の課題である。

【文献】

- 小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈 2007 ビデオ視聴による統合失調症の人への偏見低減のための教育の効果 教心49回総会論文集, 353.
- 小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈・井上孝代 2007 統合失調症の人についてのビデオ視聴による偏見低減の効果 応心74回大会論文集, 59.
- 小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈・久木田隼 2008 「浦河べてるの家」についてのビデオ視聴による統合失調症を持つ人への偏見低減のための教育の効果 教心50回総会発表論文集, 141.
- Seale C, Charteris-Black J, Ziebland S. (2006)
Gender, cancer experience and internet use: a comparative keyword analysis of interviews and online cancer support groups. Social Science and Medicine. 62, 10: 2577-2590